

図書館だより

目次	
紙文化は永久（とわ）に 斎藤広信著 『旅するモンテニユ：十六世紀ヨーロッパ紀行』	— 島崎 恒藏 1
ベルリン図書館事情<番外編> — ベートーベン・ハウス協会ベートーベン図書館—	— 斎藤 広信 2
川端康雄・加藤明子著 『もっと知りたい パーン=ジョーンズ—生涯と作品』	— 印牧 沙織 3
展示「パーン=ジョーンズの芸術」	— 川端 康雄 4
上代タノ平和文庫の紹介	— 中澤 恵子 5
平成24年度夏期スクーリング開館について	— 伊東由紀子 6
	— 中澤 啓子 8



九十年館B棟側より西生田図書館をのぞむ

紙文化は永久（とわ）に

島崎 恒藏

本学の図書館には、「パピルス会」という職員の組織がある。古代エジプトでは、カヤツリグサ科植物のパピルスの茎部分の繊維を平面状に成型し、筆記媒体として用いたことは、よく知られている。紀元前300年頃には、プトレマイオス1世によってエジプトに建てられたアレクサンドリア図書館に、膨大なパピルス紙の巻物が資料として所蔵されていたという。大学図書館の「パピルス会」という名称も、多分、このような歴史的背景を意識して付けられたものであろう。

パピルス (papyrus) 紙そのものは、現在の「紙」とはかなり異なる構造のものではあるが、paper の語源にもなっている。直接的な紙の誕生は、中国の漢時代へと辿り着くが、実際には105年頃の蔡倫の技術が世界各地へ伝播していったようだ。蔡倫の時代には、樹皮、廃布、麻屑などが紙原料として使われていた。そういえば最古の布の遺品もエジプトのファイユム遺跡から出土した麻織物であり、保存状態さえ良ければ、麻のような物質は長期間でも安定していることがわかる。わが国では、称徳天皇の命によって作られた百万塔陀羅尼（経文）が、最古の紙の印刷物として現存する。

麻や紙を構成するのは植物繊維であり、主成分はセルロース（繊維素）と呼ばれる物質である。その化学構造を「β-グルコース（グルコピラノース）が1,4位置でβ-グリコシド結合した長鎖高分子」と説明されれば真に味気ないが、“セルロースは植物体に広く分布し（毎年、 10^{11} ~ 10^{12} トンもの膨大な量が地球上で作られている）、人類が古い時代から衣服や紙などとして、常に生活の中で有効活用してきたエコな物質”と思えば、改めて親近感も湧いてくるというものである。

紙の製造技術と印刷技術とが融合されて情報媒体として広く利用されるようになり、今や私達の生活に無くてはならないものになっている。しかしこの紙媒体が現在、一つの大きな転機を迎えている。それは言うまでもなく、書籍、その他で進んでいる電子化の流れである。電子化が進展することに対しては、それなりに十分な必然性がある。事実、本学を含め大学図書館などでは、特にジャーナルの分野で大きな恩恵を享受している。しかしそうであっても、電子化が紙媒体を完全に駆逐するとは、到底思えない。いささか感性的ではあるが、本に触れた時の存在感やページを繰った時のある種の充足感、そして温もりを感じることができるのは、紙媒体を通してのみであろう。その根底にあるのは、長年、培われてきた紙（セルロース）に対する親近感かも知れないが、それ以前に、紙文化は人類のDNAの中に組み込まれているという気さえする。これからの季節は、指先でそっと暖かみのあるページを繰りながら、夜長を過ごす絶好のシーズンである。

(図書館長・被服学科教授)

斎藤広信著

『旅するモンテーニュ：十六世紀ヨーロッパ紀行』

斎藤 広信

歴史家リュシアン・フェーヴルは、『フランス・ルネサンスの文明』（ちくま学芸文庫）のなかで、ルネサンス時代の人々にみられる特徴として「放浪的性向」があることを指摘し、「この時代、誰も彼もが旅をしている」と語っている。実際この時代（15,16世紀）のヨーロッパ人は、王侯貴族から庶民に至るまで、聖職者から職人・芸術家まで、あらゆる階層の人々が旅をしている。また多くの航海者・探検家が大航海の旅に出ている。本書で取り上げるミシュル・ド・モンテーニュ（1533-92）もその一人であり、しかもこの時代には稀な「楽しみのために旅する人」であった。

モンテーニュと言えば、『随想録』とも訳されている『エッセー』（1580,1588）という滋味あふれる著作によって広く知られており、「書齋の人」というイメージが強いかもしれない。ところが『エッセー』の著者は、旅を楽しむ「馬上の人」でもあった。1580年3月、数年前から断続的に書き継いできた長短94の章からなる『エッセー』初版を刊行したあと、彼はフランス南西部のボルドー近郊にある自邸を出発、パリを経由してフランス東部、スイス、ドイツ、イタリアへの旅に出かける。およそ17ヶ月（1580年6月22日から1581年11月30日）におよぶ長旅であった。

旅の同行者は、秘書役の男と4人の若者（モンテーニュの末弟と義弟およびパリ近郊で合流した知人で大貴族の若殿と同世代の貴族）である。4人の若者は、法律の勉強あるいは剣術修行のためにパドヴァやローマに残る。秘書役の男は、主人モンテーニュにほとんど付き従い、旅の日記を半分近くまで丹念に記しつづけている。理由はわからないが、モンテーニュはローマ滞在の途中でこの男に暇をやり、以後は自らがフランス語とイタリア語で日記を書いている。

この長旅の日記は、18世紀後半に偶然モンテーニュの自邸で発見され、『旅日記』と題して刊行された。公刊をまったく意図しなかった、私的な旅の覚え書きであるが、秘書とモンテーニュの筆によって、旅を楽しむ「馬上の人」モンテーニュが、飽くなき好奇心を持って旅中で見聞したこと、体験したこと、感じたことがありのままに書かれており、実に興味深い旅行記となっている。たとえば、男になった娘の話、宗教改革後のスイス、ドイツ諸都市の宗教事情、旅宿の設備や料理など宿泊体験談、香水を売るイタリアの奇妙な修道士たち、ルネサンス期のイタリア庭園見物、腎臓結石治療のための飲泉と入浴とシャワーによる湯治日記など、当時の多岐にわたる記述は現代の読者の眼から見て興味はつきない。

ところで筆者は数年前（2007）に大学から半年間のサバティカル休暇をいただいたので、その機会を利用して、レンタカーでモンテーニュの旅の足跡を辿ってみた。この旅人が泊まった宿のいくつかは現在も営業中であることを確かめたり、『旅日記』に詳述されているイタリア庭園の魅力を実感したり、いわば現地でもンテーニュの旅を少なからず追体験することができた。

そのときのノートや写真・資料を整理しながら、これまで『エッセー』の参考資料と見なされてきた『旅日記』にスポットを当てて、その面白さを一般読者に紹介できたらと考えはじめた。定年退職（2012年3月）を前に、大学の紀要などに発表してきた数編の拙論と2007年の旅のノートを参考にして、一般読者に向けて書き下ろしたのが本書である。

本書は、16世紀後半のヨーロッパをく旅するモンテーニュの足跡をつぶさに追いながら、ルネサンス期の文化・自然・都市の風景を再構成しようと試みたものである。図版や写真も多数掲載したので、一読していただければ幸いである。

本書の主な目次は以下のとおり。序章（モンテーニュとその時代） 第1章～第6章（フランス東部の旅、スイス、ドイツの旅、イタリアの旅、ローマ滞在記、湯治日記、トスカナ巡遊、そして旅の終わり） 第7章（帰国後のモンテーニュ） 終章（モンテーニュとく旅）

（本学名誉教授）

ベルリン図書館事情<番外編> —ベートーベン・ハウス協会ベートーベン図書館— 印牧 沙織

1990年10月3日ドイツは正式に東西統一を果たしたが、それ以前西ドイツは憲法上ベルリンを首都としつつボンンを暫定首都とした。現首都ベルリンから比べるとこじんまりしているが、今なおこの都市に設置されているいくつかの省庁にボンは暫定首都の名残をとどめる。そしてなんとと言ってもルードヴィヒ・ヴァン・ベートーベンの生誕の地として有名だ。

ボン市内の賑やかなマルクト広場を過ぎてボンガッセという通りの突き当りに、ピンクの壁に新緑が印象的な扉の家がある。ここがベートーベンの生家として、現在ではベートーベン・ハウス協会 (<http://www.beethoven-haus-bonn.de>) の本部兼ミュージアムとされている。

ベートーベン・ハウス協会はミュージアムの運営だけでなく、隣接する付属機関ベートーベン・アルヒーフと共にベートーベン研究を先導する最高峰の研究機関としての役割を担う。そして、この機関、ベートーベンの生家から三つ先の建物の3階に私設図書館ベートーベン図書館を持つ。図書館にしては規模が小さいが、ベートーベンに関するその蔵書は世界一を誇る。所蔵するメディアは、図書5万冊、雑誌160誌、楽譜2.7万誌（そのうち6,500誌がベートーベンの作品）、AV資料2,500タイトル、その他18の個人収集も当館の蔵書として委嘱されている。ベートーベンの直筆譜をはじめ様々なベートーベンにちなんだ本が揃い、その中で最も古いものはベートーベンの父ヨハンが所有していたとする本で十六世紀まで遡る古書だ。この図書館、ベートーベンの作品における受容史の研究に貢献的で、同じ作品でも様々な版と刷を見比べることが出来る。ベートーベン研究の貢献はこれだけではなく、当館先導のベートーベンの本棚を再現するというプロジェクトでは、ベートーベンが手にした楽譜だけでなく彼が読んだとする小説や詩集を調査しその収集が行われている。このプロジェクトはアンティーク本の収集が目的の一つとなるため、個人単位からの資金提供を現在募集している。



ボン市内のベートーベン像

館内は歴史あるベートーベンの生家とは対照的に、閲覧室の一面はガラス張りのモダンな造りとなっている。しかし、閲覧者に用意された机はベートーベンの時代のアンティークというから「ベートーベン」に徹底されたコーディネートには脱帽するばかりだ。館内の案内をしてくれた司書のステファニー・クーバンさんは「閲覧室はご覧の通りこの4人がけのアンティーク机一つだけが準備されているだけなので事前の予約をしてくれると好ましい」と話す。開架の図書は手動式移動書架に収められ、密集配架によって限られたスペースを効率的に活用する努力が見られる。ただし事典・辞書などの参考図書に限っては閲覧室を囲むように書架が配置されており、利用者の便宜を考慮した図書館の心遣いに好感を覚える。

【利用方法】 開館時間は月曜～金曜、10時～13時/14時～17時。図書館利用の予約は bibliothek@beethoven-haus-bonn.de にてメールより可能。蔵書のほとんどはOPAC (www.beethoven-haus-bonn.de/sixcms/detail.php?id=&template=opac_bibliothek_en&opac=kat_en.pl) にて検索が出来、直筆譜及び書簡、画像そしてベートーベンにちなむ昨今のメディア情報に関してはそれぞれ専用の検索機がインターネット上に設置されている (www.beethoven-haus-bonn.de/sixcms/detail.php?id=39036&template=&_mid=Kataloge)。図書館はメディアのデジタル化にも積極的で、親機関のベートーベン・ハウス協会下、デジタル・アルヒーフは世界各国からアクセス出来る。

(ベルリン・フンボルト大学 学生、本学英文学科 卒業生)

川端康雄・加藤明子著

『もっと知りたい バーン＝ジョーンズ—生涯と作品』

川端 康雄

本書は東京美術の「もっと知りたい」シリーズの一冊として書き下ろされた。このシリーズは日本と西洋の画家や流派を取り上げたオールカラーの入門書で、2005年に『もっと知りたい 葛飾北斎』を出して以来、これまで50タイトルを出している。レンブラント、ゴッホ、モネ、尾形光琳、東山魁夷など定番の画家を含む一方で、「世紀末ウィーンの美術」、「法隆寺の仏たち」といったテーマも見られる。イギリスを扱ったものとしては「ウィリアム・モリスとアーツ & クラフツ」に次いで本書が2冊目となる。日本でこの画家を単独で取り上げた類書は（翻訳書を別とすれば）他に見当たらない。今年三菱一号館ほかを巡回した「バーン＝ジョーンズ展——装飾と象徴」展の開催とも関連するが、ターナーやコンスタブルを差し置いてバーン＝ジョーンズをまず取り上げるのは、近年の日本でのイギリス美術史の見取り図の変化を反映しているといえるのかもしれない。



『もっと知りたい バーン＝ジョーンズ』表紙

エドワード・バーン＝ジョーンズ（1833-98年）は広義の意味で「ラファエル前派」の画家とみなされる。本来のラファエル前派は1848年にD・G・ロセッティ、W・ホルマン・ハント、J・E・ミレイの3人が中心となって結成したグループで、その名称はロイヤル・アカデミーが推奨するルネサンス盛期の巨匠ラファエロではなく、それ以前のイタリア絵画の素朴で真摯な芸術を理想としたことに由来する。この前衛集団の活動期間は5年ほどで、バーン＝ジョーンズとウィリアム・モリスの両者がオクスフォード大学在学中の1854年にこの派の存在を知ったときには活動を終えていた。だが当初の理想はロセッティを介してこの若者たちに受け継がれ、その継続性から彼らは「ラファエル前派第二世代」という呼称を冠せられる。

本書は批評家ジョン・ラスキンやロセッティの影響下で画家修業を始めた修業時代から、1870年代後半にグローヴナー・ギャラリー展で一気に脚光を浴びてイギリスを代表する画家として欧州でも名声を得た次第を辿り、同時にモリス商会で手がけたタイル画やステンドグラス、またタバ

ストリーの下絵デザイン、さらにケルムスコット・プレスでの木口木版挿絵のデザイン作品の具体例を見ながら、装飾芸術の方面でモリスとともに果たした貢献も描いている。

執筆者の一人として、本書の制作過程のことを少し記しておこう。英文学畑ということもあり、美術書籍の執筆はこれが最初だった。B5判80頁という限られたスペースのなかに画家の主要作品の図版をいかに美しく効果的に配置するかというのが最優先事項であった。執筆前に図版の配置案を編集者と練り、それぞれのトピックを語るテキストの文字数もあらかじめ決めてから、その制約のなかで過不足なく収まるように執筆を行った。共著者の加藤明子さんは美術史家なのでこのやり方はお手の物だが、私自身は初めての経験で、最初はとまどったが、本としての統一感をもたらすのに有益なやり方であることが納得され、楽しんで書くことができた。カラー図版の色合わせをかなりの時間をかけて綿密に行ったのも初めてで、なるほど美術書というのはこのように作るのかと新鮮な驚きを覚えた。そのこだわりの甲斐あって、絵は実際に現物を見るにしくはないとはいえ、本書の図版の複製・再現の出来は、この手のものとしてかなりうまくいったように思う。

最後に、本書で用いた『チャーサー作品集』の図版は日本女子大学図書館が所蔵する版を使わせていただいた。泉会より寄贈された稀観本をこのように有効活用できたのはありがたいことだった。

(英文学科教授)

一図書館（目白）玄関ホール展示一

バーン＝ジョーンズの芸術

2012年6月7日(木)～7月12日(木)、英文学科川端康雄教授ご所蔵資料・展示解説による「バーン＝ジョーンズの芸術」展示を図書館（目白）玄関ホールにて行った。装飾性と象徴性を併せ持つバーン＝ジョーンズ独自の様式に満たされた夢幻的空間に、展示期間中6月14日(木) 13:00～16:00、6月15日(金) 13:00～16:00、6月16日(土) 10:00～16:30には、2009年度泉会「貴重資料購入援助費」による購入資料『ジェフリー・チャーサー作品集』ケルムスコット・プレス、1896年の特別展示もあり、バーン＝ジョーンズの芸術世界に更なる彩りを添えた。

麗しい展示風景は <http://www.lib.jwu.ac.jp/lib/tenji1206.html> からぜひご覧いただきたい。



<展示図書一覧>

書名	著編者名	出版者	出版年
Sir Edward Burne-Jones	Malcolm Bell	George Bell and Sons	1892
The life and work of Edward Burne-Jones, Bart	Julia Cartwright	The Art Journal Office	1894
Memorials of Edward Burne-Jones (2nd. ed.) 2 v.	G B-J	MacMillan	1906
The beginning of the world (New ed.) Burne-Jones	Edward Burne-Jones	Longmans, Green	1903
Burne-Jones	Christopher Wood	Stewart, Tabori & Chang	1998
Sir Edward Burne-Jones	Russel Ash	Harry N. Abrams	1993
サー・エドワード・バーン＝ジョーンズ	ラッセル・アッシュ解説	リプロポート（発売）	1994
象徴派の絵画	中山公男・高階秀爾責任編集	朝日新聞社	1992
Burne-Jones	Debra N. Mancoff	Pomegranate	c1998
The last pre-Raphaelite	Fiona MacCarthy	Faber and Faber	2011
The pre-Raphaelites and Italy	Colin Harrison and Christopher Newall	Ashmolean Museum, Lund Humphries	2010
Edward Burne-Jones	Stephen Wildman and John Christian	Metropolitan Museum of Art, distributed by Harry N. Abrams	c1998
Edward Burne-Jones 1833-1898	[Traduction, Pierre-Emmanuel Dauzat]	Reunion des musees nationaux	c1999
もっと知りたい バーン＝ジョーンズ	川端康雄, 加藤明子	東京美術	2012
Burne-Jones (2nd ed.)	Martin Harrison and Bill Waters	Barrie & Jenkins	1989
Burne-Jones	Burne-Jones	Arts Council of Great Britain	1975
ジョン・ボールの夢	ウィリアム・モリス	晶文社	2000
世界のはての泉（全2巻）	ウィリアム・モリス	晶文社	2000
Poems by the way (Facsimile)	William Morris	Scolar Press	1981
The story of Cupid and Psyche 2 v.	William Morris	Clover Hill Editions	1974

（館員・閲覧係 中澤恵子）

上代タノ平和文庫の紹介

伊東 由紀子

「時局は實に危局であります。(略)未だ實際の社會の動きに、當面の責任を分擔して居られない極めて若い女性の方々の心にも此の危局がなげかける重壓感は決してなまやさしいものではなからうと思います。(略)問題はあなた方の心の奥に、果たしてこの時局に對する本當に正確な理解があるか如何かであります。」〔原文ママ〕

先の文章は1938年3月に、本学6代目学長である上代タノ先生が「戦時下、學窓を巢立たんとする若き女性に」と題して寄せられた文章の中の一部です(初出『女子青年界』35卷3号、引用は『上代たの文集』より)。それから33年の時を経た1971年、日本女子大学創立70周年記念の年に上代先生は本学図書館に上代平和文庫を寄贈されました。現在は図書館5階に位置する「上代タノ平和文庫」を意識している学生の皆さんはそう多くは無いかもしれません。しかし先生の生き方を深く知ると、この文庫に対する概念が変わるのではないかと考えます。この機会に上代平和文庫におさめられた図書から上代先生の生涯を辿り、平和文庫の意味を考えてみては如何でしょうか。

資料①『上代たの先生米寿記念英米文学論集』上代たの先生米寿記念実行委員会 1975年

資料②『上代タノ—女子高等教育・平和運動のパイオニア—』島田法子,中嶋邦,杉森長子 2010年

資料③『上代たの文集:女性教育の先達』上代たの文集編集委員会編 1984年

資料④『上代タノ先生に学ぶ:13歳で親元をはなれ、女子高等教育や世界平和へ身命を懸けた世界に輝く星』春殖賢人ライブラリー編 2011年

資料①冒頭の献辞は、上代先生の生涯を通じた女子教育への情熱と平和活動への信念を、その人柄を絡めながら愛情をこめた文章に短くまとめています。この献辞で注意を引くのは、最初の留学先である Wells College (ウェルズ女子大学)の President Long が長年温めてきた設計図をもとに、上代先生が本学図書館を日本初の開架式図書館として完成させたこと、上代平和文庫を「母校図書館の一つの大きな特徴として、ユニークな存在にまで高めようと念願され、毎月数冊の書籍を一々目を通して選書し、寄贈を続けて(①v頁)」いるという箇所でした。上代先生が自ら文庫の選書にあたられていたことは『図書館だより』No.142(2011.11)で松本晴子氏も述べられています。

ではなぜ上代先生は、留学先のウェルズ女子大の President が温めていた図書館の設計図を用いることが出来、そして自ら寄贈した文庫を上代“平和”文庫と名づけたのでしょうか。そのことについて知識を深めるには、成瀬記念館所蔵の一次資料を多用した資料②が最適です。

上代先生の恩師は成瀬仁蔵と新渡戸稲造といわれますが、両名との出会いはどちらも日本女子大学に入学したことによるものでした。学業が優秀であったことから在学中から一際ぬきんでた存在であった上代先生は「在学中、成瀬校長にかわいがられ、大隈重信への訪問にお供したり、新聞界や政界の指導者とのインタビューに同席したり、ときには洪沢栄一の通訳をつとめた(②32頁)」り、成瀬先生が新渡戸稲造等と創刊した『Life and Light』の編集事務を任せられたりもしています。そして後には私設秘書のような形で成瀬先生のそばで働き、成瀬先生の理想とする教育論に最も間近く接することになります。

また出雲の親元を離れて寮生活をするようになった際、校内の寮ではなく「外寮」と呼ばれる曉星寮に入寮したのも幸運の一つでした。寮の運営は当時英文学部教授であったE・グラディス・フィリップスという女性宣教師により行われていて、英語力が磨ける上に外国料理や新しい文化にも触れられる学生憧れの寮だったそうです。その寮生活の中、寮名物といわれたフィリップ教授の聖書講義で論争を仕掛けるほどの才気を見せたことで、教授から成瀬先生と親しい関係であった新渡戸稲造を知的に聖書を語る人物として紹介されます。朝夕訪れる間柄となった新渡戸夫妻との縁は長く続きました。上代先生が留学を希望した際には、当時日米交換教授としてアメリカに滞在していた新渡戸は留学先にウェルズ女子大を推薦し、後に国際連盟事務次長の任についた際ジュネー

ブに構えた私邸には上代先生が半年滞在するなどしています。新渡戸の国際連盟事務次長就任は上代先生に強く影響を与え、国際教育・世界平和活動への道を強く意識することになります。

「成瀬仁蔵も新渡戸稲造もともに平和を希求し、女性の平和運動の発展を期待して（②296頁）」いましたが、残念ながら成瀬先生は肝臓がん悪化のために思うように動くことができなくなってしまいます。そこで成瀬先生は「以前から厚い信頼を寄せて、教育・文化活動を共にしてきた同志ともいうべき国際経験豊かな教育者である新渡戸に相談し、「世界平和」の理想実現に向けた女性たちの活動について（②176頁）」今後を託します。それを受けて新渡戸が1918年に自宅で開催したのが国際問題研究会であり、「婦人平和協会」を経て現在の「WILPF（婦人国際平和自由連盟）日本支部」となる日本最初の婦人平和団体でした。上代先生は34歳で請われて最年少メンバーとして参加し、国際書記の任に就きます。WILPFとはアメリカ人女性初のノーベル平和賞を受賞したジェーン・アダムスが1915年にオランダのハーグに設立した団体です。1923年アダムス初来日時に親しく面識をえることが出来た上代先生は、女性の平和活動について一層の熱意をもって取り組むことになります。資料③は上代先生の論や講演をまとめた、先生の人柄を知るのに最良の本となっていますが、その中で「女史が提案した恒久平和建設への条件は、後日ウィルソン大統領の平和十四ヶ條の基礎となっている事は人のよく知る處である（③132頁）」「ミス・アダムスは、なんとというか、とてつもなく大きな、丁度ロッキー山脈のような人であった（③135頁）」というように、アダムス女史をいかに尊敬していたかを語っています。

アダムス女史と知遇を得たこともあり、活発に行われるかと思った婦人平和協会の活動は、日本の第二次世界大戦参戦から敗戦の中で一端途絶えることになります。しかし戦時中も個々人としての心のこもった交流は続き（②76頁）、終戦の後は日本の物資欠乏を知るやWILPFの各国支部やウェルズ女子大からの救援物資が上代先生の名の下に続々と届くようになりました。資料④の27頁には、上代先生帰省時のエピソードとして「ありがたいことに、私は世界中にお友達ができてねえ」という言葉が載っています。ウェルズ女子大は「上代の学長就任のニュースに（略）沸いた（③76頁）」といい、この文章の最初に載せたPresident Longが長年温めてきた設計図をもとに開架式図書館を完成させたという話も納得できるほど、交流は親密に続いていました。

戦時中の上代先生のエピソードとして、学生の勤労働員に付き添った際、お昼休みと仕事後の一時間英語を教えていたところ、敵国語を教えるとは何事かと将校に取り立てられた話が有名です。その際、戦後の交渉には敵国語といわれる英語こそが必要になると逆に将校を説得し、感銘を受けた将校の一人が特高警察に不審をもたれないように警戒役を自ら買って出るようになったというくだりは、資料②246頁や資料④23頁、または『戦争と女性雑誌：1931～1945年』（近代女性文化史研究会2001年）の177頁に詳しく描かれています。血気にはやる将校にひるまず論を述べられたのは「海外で留学生活を送ってきた経験が、相手に気合負けしない度胸と外国事情を話して聞かせるだけの余裕を生み出した（④24頁）」からとされ、「第二次世界大戦期において、英文学部長として英文学科を守り導くという大役を果たしたが、その際にもタノさんの国際性が発揮された。タノさんの留学経験が、その判断力に大きく貢献したのである（④24頁）」とも評されています。

知識と人脈、経験と判断力と向上心。上代先生の生涯を表す言葉は何になるでしょう。冒頭の「問題はあなた方の心の奥に、果たしてこの時局に對する本當に正確な理解があるか如何か」という問い。これは、現代の時事問題に晒される私たちにも強く訴える力を持っていないでしょうか。上代平和文庫のラベルの色が一般図書と違い平和をあらわす緑になっていたこと（④31頁、現在別装）、また資料④に附属しているDVDのスライドにはピカソが上代先生に送ったという鳩と女性の絵があること、そして一冊一冊心をこめて日本女子大生に平和にまつわる図書を選び続けた上代先生のこと。そんなことを脳裏に置きながら、改めて上代平和文庫書架を散策してみてもはどうでしょうか。

（逐次刊行物係、本学日本文学科 卒業生）

平成24年度夏期スクーリング開館について

今年のスクーリング開館は8月6日(月)～9月1日(土)の4週間で、例年同様24日間でした。昨年に引き続き夏季節電対策として、空調は1階～4階のみ運転、5階は閉室とし、洋雑誌・上代タノ平和文庫資料は出納式で閲覧していただき、ビデオ・DVDの視聴は1階AVコーナーB室で対応いたしました。夏季節電対策にご協力いただきましてありがとうございました。

今年度の利用状況は左下の通りです。開館時間は<月～金>8:45～19:00、<土>8:45～18:00ですが、昼休みはもとより、始業前に来館して登録や貸出をしていく方も多いようです。今年はスクーリング受講者数が1,000人を切り、ほとんどの統計数字が昨年を下回りました。登録者率(受講者数に対する図書館登録者数の割合)も、昨年49.1%から今年46.8%に下がりました。グループ研究室を使用して、館内で行われる授業が減ったことが原因と考えられます。通常はなかなか来館できない方こそ、夏期スクーリング受講期間中に自主的に本学の大学図書館を利用し、より多くの資料に触れ、充実した時間を過ごしていただきたいと思います。



スクーリング登録風景

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	24	23	22
開館日数	24	24	24
入館者数	4,712	5,553	5,902
1日平均	196.4	231.4	246
最高	274	318	298
最低	146	145	184
受講者数	981	1,038	1,222
登録者数	459	509	543
1日平均	19.2	21.2	23
貸出冊数	1,424	1,606	1,812
1人当たり	3.1	3.2	4
1日平均	60	67	76
最高	109	111	141
最低	28	34	43
貸出日数	24	24	24
複写枚数	11,147	14,242	15,501
1日平均	464.5	593.5	646
一般学生・教職員 その他の貸出	1,260	1,599	1,492
1日平均	52.5	66.7	62.2

また通信教育課からのご依頼により『女子大通信』に「リポート・学習のための参考資料の探し方<1><2>」を図書館参考係が執筆しました。<1>では、図書の探し方(公共図書館・他大学図書館の利用について)、<2>では、白書・統計報告書、法令、新聞記事、雑誌論文の入手などについて、本学図書館以外で資料を探すための方法をコンパクトに説明しています。ぜひご覧ください。その際は記事を読むだけでなく、実際にサイトにアクセスし、資料の検索を何度も試してください。検索法が身につけてきます。

(館員・閲覧係 中澤啓子)

参考係利用状況(質問処理件数)

年度(日数)	24(24)	23(24)	22(24)
一般学生・教員	36	26	30
スクーリング生・その他	41	56	40
合計	77	82	70
1日平均	3.2	3.4	2.9

前号(No.144) p.8掲載の2011年度実施した利用者向け講習会「教員からの依頼等により授業時間内に実施<西生田>」について、心理学科の回数・人数を訂正します。(誤)2回27名→(正)3回38名

編集後記 上代タノ先生は好んで「たの」と署名された(戸籍上は「タノ」)とのこと、p.6掲載の資料は各出版物の表記のままである。印牧沙織さんは西生田図書館でのインターンシップをご縁に、ベルリン等の図書館事情について連載をしていただいた(No.140, 141, 142, 144, 145)。巻頭写真は、鈴木学館員撮影。
平成24年度図書館だより編集委員：中曽根緑、大沼真美、中澤恵子、鈴木学 (中曽根)